

## 北のブランドカ～軽種馬を育てる～

新井 誠さん・鈴美さん夫妻（胆振管内むかわ町）



昨年(2010年)10月、フランスで行なわれた世界最高峰の競馬レース「凱旋門賞」で、4歳  
ひんば牝馬の「ナカヤマフェスタ」が国内産馬では歴代最高の2着に輝いた。この名馬のふるさと  
は、むかわ町米原地区にある新井牧場。勝つウマを生産してきた新井さん夫妻は、リスクを  
回避する経営で、軽種馬産地を支えている。

道央圏の南方に位置し、シシャモの水揚げで知られる胆振のむかわ町は、日高地方に次ぐ馬産地だ。数10戸の生産農家が軽種馬経営を手がけている。

名馬を生み出した新井牧場は、門別競馬場にほど近く、日高自動車道のすぐそばに広がる。

冬場は昼間、放牧する。夕方、きれいに掃除され、分厚い敷料を入れてある厩舎きゅうしやをめざし、ウマたちが帰ってきた。

「素質のあるウマがいても、手をかけて育てないと大成できません。毎日の仕事を積み重ねて、結果が出るのはずっと後のこと。ウマのためにといい、前向きに取り組んできたつもりですよ」

と、牧場主の新井誠さん(50)が作業の手を休めて話す。

▲牧場主の新井さん夫妻

高知県で生まれ育ち、ウマに接してきた妻の鈴美さん(47)も、

「たいへんなのは春先の出産シーズンで、カメラの画像で兆候を確認し、夜中でも厩舎に駆けつけます。自分の娘たちは、ほったらかしなんですけどね」

と、笑顔を見せる。

二人とも、小さいころから大好きだったウマとの生活を天職にする。愛馬たちに注ぐきめ細かな愛情が、国内外の有力レースでの栄冠をもたらしている。



## 預託馬を中心にしてリスクを回避

新井牧場は、JAむかわの理事も務めた先代の誠三さん(80)によって、今から40年ほど前にスタートした。

富山県出身の先代は戦後まもなく北海道へ渡った。むかわ町内の農家で修業を積んだのち、二三

子さん（73）との結婚を機に独立。昭和30年代初めには稲作専業経営に乗り出している。

やがて、減反政策が本格化するなかで、大きな牧場から1頭の繁殖用牝馬を預かり、その子を15か月ころまで育てる経営に着手。当初は「仔分け制度」と呼ばれる、所有者と育成者が生まれた子の利益を分配する手法を取り入れていた。

その後、繁殖用牝馬を増やし、軽種馬の占める比率が高まっていく。

「少年時代は水田よりもウマの仕事を手伝ったね」と話す誠さんは、酪農学園大学に進む。そこで家畜育種を学び、ウマの血統をテーマに卒業論文を書いた。

昭和57年に同大を卒業して数か月間、金沢競馬場の厩務員として働き、実家に戻って軽種馬の専業経営に転換。20年ほど前、離農跡地を求めて現在地に移転した当時は、自己の所有馬と預託馬の比率が半々くらいになっていた。

二人が結婚したのはそのころだ。

「わたしはサラリーマン家庭で育ち、動物好きで、乗馬をしたいと思っていました。高校を卒業後、（新ひだか町の）静内の牧場で10年ほど、今と同じような仕事をやっていました。『ずっとウマと付き合いおう』と考えていましたが、夫と知り合い、『良さそうな人だな…』と思ってね」

と、鈴江さんが振り返る。

二人三脚で牧場経営を切り盛りしてきた。農地の6割にあたる12haが放牧地。今は、本州在住の馬主から預託中の繁殖牝馬8頭、当歳馬（その年に生まれたウマ）10頭に加え、往年のレースで活躍して牧場経営を支えた2頭の自己所有馬を飼育する。

「期間に応じた料金をいただいて繁殖牝馬を預かり、その子を一年半ほど育ててせりに出します。ただ、近年はウマの売れ行きが悪くなり、預託馬が集まりにくいのが実態ですね。町内では、うちほど預託馬の多い牧場はありません」

と、誠さんが説明する。



<sup>しゅぼぼ</sup>種牡馬のところへ連れて行き交配させるが、種つけ料は最高額で1,200万円。受胎率は8割ほどだ。交配から出産、育成…と、販売にこぎ着けるまでの2年間、先行投資を続けなければならない。

「食べ物を作る農業とは違って、軽種馬には食料自給という大義名分がない。それだけに自力でやらなければなりません。種つけ料以下の値段で販売しても、所得補償はされない—そうしたリスクを負った職種なんですよ」（誠さん）

稲作から転換組の新井牧場は資本力が乏しい。そこで、投資を早く回収するために預託率を高め、経営面のリスクを少なくするよう努めてきた。

ウマたちに注ぐ愛情もひと一倍強い。清潔な厩舎の廊下には体重計が置かれ、当歳馬が順調に増体しているかどうか毎日測定する。体温のチェックと併せて健康管理に役だててきた。

「出産時は寝ずにそばにいることもありますね。生まれてすぐウマに触れ、なついてもらう。決して怒らず、好かれるようにすることがだいじです」

採草地で乾草をつくり、放牧地の草架に置いておく。厩舎では、ルーサンやサイレージ、サプリメントなどを与え、良質の飼料を欠かさない。

こうした努力を重ね、馬主や調教師との信頼関係もたいせつにする。多くの人にウマの魅力を伝えたいという思いも強い。それが、名馬を生産する原動力のようだ。

## 地道な努力の蓄積が実を結ぶ

阪神競馬場でのG I レース・宝塚記念で、強豪を抑えて優勝。凱旋門賞で二着。4～10月集計分のワールド・サラブレッド・ランキングでは世界第5位——と昨年、新井牧場で育ったナカヤマフェスタは大活躍。ノーベル賞を受賞したむかわ町出身の鈴木章さん、凱旋門賞に出場した名馬の双方を祝福する垂れ幕も登場するなど、町は明るいムードに包まれた。

ナカヤマフェスタは平成 18 年、母のディアウィングを預託中に誕生した。父はステイゴールド（白老町）。生後 15 か月頃セールに出され、20 年に東京競馬場でデビューしている。

「一歳くらいまでは普通のウマで、気まぐれなところがありましたね」

と、育ての親の誠さん。いい成績を収めるウマかどうかは、デビューするまで調教師でも見抜けないものだという。

宝塚記念のときは応援に駆けつけたが、その日のうちにとんぼ返り。生き物相手の仕事なので、夫婦そろって泊まりがけで出かけることはできない。

知名度や人気の高い凱旋門賞は、国内で最上級の活躍をした競走馬が出場する海外レース。昭和 40 年代から昨年までに 10 頭の日本調教馬が遠征した。そのなかでナカヤマフェスタは、平成 11 年のエルコンドルパサー（アメリカ産）と同じく、二着の栄冠。国内産馬としては最高位の成績を収めたのである。

「関係者のみなさんといっしょに、競馬場のいちばん上にある馬主席で、双眼鏡で眺めながら応援したんです。無事に走ってくれるか、ドキドキした。ダイレクトに喜びを感じられ、最高でしたね」

と、フランスまで出向いた鈴美さんは、うれしそうに話していた。



海外からの競走馬導入のあおりを受け、経営の苦しい次期や、道営競馬の存続の危機もあった。それらに振り回されず、ウマに愛情を注ぎ、日々の管理を積み重ね、軽種馬のブランド化を図ってきた。

「コストを下げるために雨が当たった茶色の乾草を与えたり、体重や体温を計る手間を省いたりする人がいるかもしれない。でも、手抜きして育てて走るウマはいません。わ

たしは草地管理にも配慮し、これからも地道にやっています」

と、誠さんがきっぱり言い切る。

数々のレースで活躍し、平成15年に引退したゴーイングスズカは功労馬として新井牧場で余生を過ごしている。愛するウマたちとともに、新井さん夫妻の忙しい毎日が続いていく。